

(有形文化財・考古資料)

いた 板 碑 阿弥陀坐像板碑・地蔵立像板碑 2 基

【概要】

- 所在地 尼崎市大庄北2丁目7番1号
- 所有者 宗教法人 東光寺 代表役員 平井隆祐
- 時代 阿弥陀坐像板碑…鎌倉時代後期頃、地蔵立像板碑…南北朝時代中期頃
- 法量 阿弥陀坐像板碑…112.1cm、地蔵立像板碑…95.3cm (いずれも現高)
- 材質 花崗岩製
- 現状 浄土宗東光寺境内の地蔵堂横から東西に伸びるブロック塀沿いに並ぶ30基の石造物群中にあり、ともに完形品。石造物群は向かって左端(東側)の五輪卒塔婆1基に続いて一石五輪塔などの小塔19基が2列に並び、右手(西側)には板碑など10基が1列に並んでいるが、阿弥陀坐像板碑と地蔵立像板碑は10基の石造物列の向かって左から2番目、3番目に建てられている。

【説明】

阿弥陀坐像板碑は頂部から根部露出部までの現高は112.1cm、額部の幅は29.5cm、厚さは21.2cm。『尼崎市史』によれば総高は136cmとなっている。背面は船底形である。身部の上半部には舟形輪郭を彫りこみ、内に定印の阿弥陀坐像を刻出し下に蓮華座をすえている。蓮華座は素弁七葉で、中央の大弁の左右だけに小花を入れた丁重な造りである。身部の下半部には文字は刻まれていない。碑伝形で、無銘であるが、全体の構造様式や尊像、蓮華座の手法などから鎌倉時代後期に造立されたものとみられ、市内に残る最古の板碑である。また、地蔵立像板碑は頂部から根部露出部までの現高は95.3cmで、同じく背面を船底形につくる。額部の幅は21.8cmで、厚さは18.0cm。総高は『尼崎市史』では118cmとされている。身部の中央上部よりに舟形輪郭を彫り込み、内に棒珠持錫の地蔵立像を刻出し、下端には蓮華座を刻む。蓮華座は素弁五葉であるが、中央の大弁の左右だけに小花を入れている。根部上端の中央には三日月形の穴があげられており水を供えるためのもものとみられる。左側の阿弥陀坐像板碑と同じく碑伝形で、銘文等も刻まれていないが、規模がやや小さく、構造様式や尊像などの手法から、南北朝時代中期ごろの造立にかかると推定される。

【指定理由】

板碑は県内では在銘最古の小野市の建長8年(1256)阿弥陀三尊種子板碑を始めとして各地に伝存しており、市内でもこれまでに約20基の板碑が確認されているが、古い時代に属するものは少なく、鎌倉時代や南北朝時代の遺例はこの2基だけであることから、尼崎市指定文化財として保護し、顕彰すべき資料である。